Interview with Curt Mayer

マイヤーさんに聞きました

Strory by Makoto Nekoya

取材……なんで？ え、皇帝（カイザー）即位の一〇周年記念ってか？ そうか、そういや新帝国暦一〇年だものな。そうか、もう一五年になるんだな。

え？ 一〇周年記念であって一五周年じゃないって？

そうじゃねぇんだよ、俺が皇帝（カイザー）に初めて会ってから一五年になったんだなぁ――――って、思わず感慨に耽っちまったってことさ。

そうさ、一五年前。皇帝陛下はまだ皇帝でも何でもなくて、まだ二〇歳前のぴっかぴかの美少年……って感じはしなかったなぁ。よっぽどの大貴族（いいところ）のぼんぼんだと思ったもんさ。え、一七歳で大佐さまだぜ。こちとら、一八の歳から苦節十何年、三〇過ぎても嫁さんの来てもねぇ、しがない曹長さんだってのにさ。

え――――あ、アリーセのことは、あとで話すから焦んなよ。時間、あるんだろ。それとも何か、これからアポが山ほどあるって……わけじゃねぇよな。

え、何の話をしてたんだっけ。

ああ、そうか。皇帝（カイザー）と初めて会った時のことだよな。

フォン・ミューゼル――――なんて聞いたこともない名字だったけど、誰もわざわざ調べようなんてしなかったさ。一七歳で大佐さまだ。調べるまでもなく、貴族のバカボンが箔付けに戦場へ出てきたんだって。

落胆したかってか？ まあ、艦長がアレでも副長とか先任が

まともなら何とかなるもんだってことは分かってたからな。ロイシュナー中佐もあの艦（ふね）にゃあ長かったし、士官連中も息が合ってた。何隻も乗り換えてきたけどさ、あの艦（ふね）が一番居心地がいいし、生き延びられそうだって思ってた。

一番厄介なのは、変に自信だけ持ってるガキが自分で艦を動かすんだってばかりにやたらと張り切るケースだな。特に部下が年上だと、意見を聴くのが沽券にかかわるとでも思うんだろうな。わざわざ、副長の上申と逆のことをやるのがいるんだ、結構これが。

たとえば———？　まあ、余計な機動をやってみたり、無闇に接近戦を命じてみたり、そうかと思うと踏ん張りどころで逃げ出したりってところさ。

心得た副長は、命取りになるぎりぎりの所を見切ってんだな。一応は命令を聞いといて、最終的には自分の、というか生き延びるための選択を優先させる。あとで艦長が怒り狂っても、まあ、生き延びられれば御の字ってやつ。

だから、貴族の出じゃない、貴族でも身分の低いところの出の副長は苦労するさ。よっぽど神経が頑丈で、胃が丈夫じゃなきゃ勤まらねぇ地位だな。俺も思ったよ、副長だけはやりたくねぇな……って。

冗談。士官学校も出てないし、登用試験受けようにもとうに年齢制限から外れてたしな。俺としては、何とか生き延びて、老後を地上で過ごせれば……なんて、そこまで先のことなんか、なぁ～んにも考えてなかったさ。

そうじゃないか、一五〇年も前から続いていた戦争だぜ。俺の代で終わる……なんて、誰が思うもんか。このままず～っと戦争は続いて、子供たち、孫たち、曾孫たちも、俺と同じように、こうやって巡航艦の中で油まみれになっているか、おバカな司令官とか、艦長とかが『帝国万歳～っ！』とかやるのに付き合わされてヴァルハラ行き———ってな一生を送るんだろうな。そう思ってた。

子供だとか、孫だとかがどうしたって———？　ものの喩えさ。俺の子供とか、孫って話をしてんじゃない。

そうだなぁ、陛下を———この人は凄い、本当に英雄って奴はいるんだ、そんな風に思ったのは、あの時さ。フェザーンの空港に降りてこられた陛下に『ジーク・カイザー』って叫んだ時さ。

誰かが音頭を取ったのか、ってか？　それは違うな。少なくとも俺は、自分が気付いたら『ジーク・カイザー・ラインハルト！』って喚いていた。

そうなんだ、『ブリュンヒルト』からカイザーが降りてこられた時、俺は思ったんだ。ああ、これで戦争が終わるんだ。戦争の終わりと一緒にカイザーが来られたんだってね。

分かってる。まだ、フェザーンを抑えただけで、自由惑星同盟も生きてたし、その後も色々あったしな。だけどな、重要なのは、ここんとこ、よく書いてくれよ。重要なのは、カイザー